

市立函館博物館報サラニップ

SARANIP

No.44 2005.3.31

平成16年度特別展報告



中島登が描いた「戦友姿絵」に見入る観覧者

士道



永倉新八の墓碑を見つめる人々

平成16年はNHK大河ドラマの影響により新撰組ブームが全国的な広がりを見せた。ドラマのロケ地となった京都はもとより、日野市や調布市を始めとした著名な隊士の出身地や関連する各地で街おこしにからめた事業や企画が発表され、年明けとともにさまざまなイベントが開催された。

函館はゆかりの地とはいえ、従来新撰組との関わりについてはさほど強調されてはいなかった。事実、彼らの活躍は主に幕末の京都であったし、主要メンバーは東北戦争の際に会津に残留し、仙台では20名足らずとなっている。函館で新撰組として活躍するのは仙台での募集に応じた隊士達であり、旧幕府軍の一部隊としての活躍も明治元年10月より翌2年5月までのわずか8ヶ月間であった。

特別展は函館ならではの特色を出すために流山以降、箱館戦争に舞台を設定。京都新撰組とは一線を画すために、「箱館新撰組」とした。彼らは旧幕府脱走軍が箱館制圧後、市中の取り締まりと警備を行い、始めは称名寺、後に弁天岬台場に本陣を移した。洋式の軍服に身を包み、新政府軍陣地への夜襲等、鳥羽伏見以来の働きは、旧幕府軍のシンボリックな存在であったといえよう。特別展では隊士個人の研究が進んでいない現状で、誰が来て、何をして、どのように進んだか、その足跡を追うことにした。展示の柱は二つ。当館所蔵の中島登資料を中心とした

新撰組と箱館戦争

「箱館新撰組の実像」と永倉新八資料（北海道開拓記念館蔵）を使った「土方歳三の英雄伝説」であり、このコーナーから人波が途絶えることはなかった。箱館戦争は土方歳三の戦死と、新撰組が籠もった最強の砦「弁天岬台場」が降伏したことで事実上の終息を迎えている。

また、今回の特別展では来館者への利便を図るために、小中学生が夏休みとなる8月を無休とし、市電やJR駅構内にポスターを掲示、公園内に幟を立てるなど、これまでにはなかった工夫も試みた。結果、61日間の開館で36,670人、一日の平均入場者数は600人で過去最高となった。

五稜郭分館は観光ルート上にあり、公園に付設して駐車場があるなど立地の良さから入館者は少なくはなかったが、今回は特別展を目当てに博物館を目指し「まっしぐら」に入館する者が多く、単に「話題性のある特別展」ではない。創意工夫のほか、報道機関はじめ関係者の協力の結果と考える。「毎年新撰組をやって下さい!」「市内のどこへ行ったら新撰組の史跡がありますか」という観覧者からの要望や、問いかけに加え調査途中で終わってしまった資料の検討など残された宿題も多い。一人一人の隊士の活躍、台場での謹慎中の様子やその後の足取りを含め、もう一度函館にこだわった新撰組の特別展を腰をすえて開催してみたいと思うのである。

佐藤 智雄

平成16年度特別企画展報告

ペリー箱館来航150年



展覧会ポスター

製 (*Hucho perryi*) などを展示しました。ペリー艦隊が来航した当時、アメリカでは世界中の石を集めてワシントン記念塔を建設していました。ペリー艦隊も箱館・下田・琉球で石を採取し、持ち帰っています。残念ながら箱館山の石が使われているかどうかは確認されていません。唯一下田で採取した石が使われていることが確認されています。6番目のコーナーでは当時のひとびとの驚き、興味、情報の交錯—同じもの、同じ人物を描いているはずなのに、全く違ったものになっている—を示すような瓦版を中心に展示しました。

今回の展示では、すべてのキャプションに、資料に関心を持っていただけるようなキャッチフレーズを付けました。賛否両論、意見をいただき参考になりました。

保科 智治

2004年はペリーが箱館に来航して150年目になります。その節目にあたって本館を会場に、ペリーやその艦隊の動向などを文書や絵画などで紹介しました。開催期間は6月29日(火)から8月22日(日)までで、3,123人の方にご観覧いただきました。

今回の特別企画展では、「Perry、浦賀へ」「Perry、横浜上陸」「Perry、下田にきたる」「Perry、箱館にきたる」「Perry、集める」「Perry、フネ・ヒト・モノ」という6つのコーナーを設けました。最初の4コーナーでは、1853年に浦賀に来航したペリー艦隊がアメリカ大統領国書を幕府へ渡すまでの様子と、翌年横浜において日米和親条約を締結し、開港場となった下田・箱館を視察するペリー一行の様子を紹介しました。5番目の「Perry、集める」のコーナーは今回の特別企画展の特色を出したコーナーです。ペリー関連の特別展等は主に文書や絵画などで構成されることが多いと思います。当館は、総合博物館であり、また長い歴史を有した博物館でもあります。その特色を活かし、このコーナーではペリー一行が主に箱館で収集した魚類・鳥類・植物・箱館山の石などを展示しました。魚類では幻の魚といわれ、ペリーの名が学名に付けられているイトウの剥



展示解説風景



平成17年度展覧会 先取りチェック!!

特別企画展 新はこだての文化財 縄文時代

平成16年12月1日に新しい函館市が誕生しましたが、これを記念して特別企画展を開催します。

合併により市の面積が大きくなって、同じ市内でわからないことが多くなったと感じる市民もいると思います。また、地域のつながりも希薄にうつることがあるかも知れません。

でも、地域の交流も、暮らしも昔から同じ生活圏のなかで活発に行われていたと考えられます。

今回、縄文時代の資料を中心に紹介することで、地域間のつながりを見ていきたいと思っています。

開催場所 市立函館博物館本館
開催期間(予定) 平成17年6月7日(火)～
8月21日(日)

中村 公宣

特別展 幕臣達の明治維新 -箱館戦争始末記-

平成17年度の特別展は、開港と箱館戦争の終結を出発点に明治期の箱館と北海道を舞台に、旧幕府方として戦い、敗れながらも明治という時代を生きぬいた人と、街と、物が辿った道を展示・紹介します。

箱館戦争により、旧幕府脱走軍の拠った箱館は彼らと共に被災し新しい時代を迎えることとなりました。脱走軍に荷担し恭順した人たちは、拘束され後に赦免されてさまざまな道を歩みます。あるものは帰農し、また求められ新政府へ出仕した者、新天地を求めて北海道へ入植する者などさまざまな形で近代日本を支えた人々を紹介します。

開催場所 市立函館博物館五稜郭分館
開催期間(予定) 平成17年7月23日(土)～
9月25日(日)

佐藤 智雄

沿海地方国立アルセニエフ博物館との姉妹提携 3 2004年度沿海地方国立アルセニエフ博物館・市立函館博物館姉妹提携2周年記念企画展報告

この展覧会は、平成16年7月5日(月)から7月11日(日)までの7日間、アルセニエフ博物館と当館の共催で、函館市芸術ホールギャラリーにおいて開催しました。

平成14年7月28日に、函館において姉妹提携を結んだ二館が、文化交流の強化と、ウラジオストク・函館の両市民の相互交流を進めるため、平成15年7月にアルセニエフ博物館で、函館市と市立函館博物館を紹介する展覧会を開催したのに引き続いて開催したものです。

「日露文化と歴史的な交流」、「ウラジオストク市の歴史」、「沿海地方国立アルセニエフ博物館」という3つのテーマを設けて、ウラジオストク市とアルセニエフ博物館について、パネルを主とした展示を行いました。パネルは、アルセニエフ博物館からこの企画のために来函した、写真所蔵専門家のクリメンコ・イライダさん、主任専門家のバプツェヴァ・イライダさんと、通訳のスマローコヴァ・オリガさんが携えてきたものでした。

7月5日のオープンでは、函館市助役、在札幌ロシア連邦総領事館函館事務所長らのテープカットの後、アルセニエフ博物館職員の展示解説が行われました。期間中、一般市民を対象とした展示セミナー、北海道博物館協会研修会も行われました。

盛会裏に終了しましたが、これからも両館の交流を推進し、市民に広く理解してもらうために、平成17年6月(予定)から本館にコーナーを設けて、パネルなどを展示していくことを計画しています。

中村 公宣



テープカット



パネルに見いる観覧者

ウラジオストクと函館
—歴史、文化の経験—

平成16年度新収蔵資料展から資料紹介

平成16年度新収蔵資料展は9月14日(火)から11月7日(日)まで開催されました。平成15年度に寄贈いただいた資料は408件2,395点にのぼり、その中から今回はスルメ加工に関する道具類を紹介します。

今回寄贈いただいたスルメ加工道具は、市内豊川町の「切鰯問屋 女川商店」で使われていたものです。店を開いたのは寄贈者の祖父で、明治末から大正初期頃に函館に渡り当初は市内住吉町でスルメ加工を行っていたようです。昭和9年の函館大火後に豊川町に移転し、寄贈者の父が跡を継ぎ昭和59年頃まで営業していました。

女川商店で行うスルメ加工は、松前漬けなどに使用するスルメをせん切りにすることです。加工方法は、スルメを長方形の木枠に何枚も重ねて万力でプレスして、板状になったスルメの塊を機械でせん切りにします。せん切りにしたスルメを屋根の上などで乾燥させ、当初は俵に詰め、後にはダンボールに詰めて出荷するというものでした。写真の機械はスルメをせん切りにするもので、巾180cm奥行90cm高140cmもある鋳物製で、動力は別のモーターを回転させベルトでつたえるよう



切鰯製造機械

になっています。

女川商店は現在取り壊されてその面影を見ることはできませんが、これらの資料が「イカのまち函館」を支えてきたことを物語ってくれています。

保科 智治

きり
するめ
切鰯製造機械

平成16年度特別企画展報告

ドライアイスで遊ぼう & 北海道における過去2000年間の環境変動と人とのかかわり

今年度は、通年講座3回、単講座33回の計36回の講座を実施しました。ここでは〈科学おもしろ講座〉と題して実施した『ドライアイスで遊ぼう』（8月12日開催）と北海道開拓記念館との共催講座とし実施した『北海道における過去2000年間の環境変動と人とのかかわり』（11月13日開催）について紹介します。

『ドライアイスで遊ぼう』は既に5回目を向かえました。集会室という閉鎖空間で行う講座で行ったためか、保護者も見学兼参加するためか、冷たい〈ドライアイス〉を扱っているにもかかわらず、大きなビニール袋を使ったシャーベット作りやアイスクリーム作りのパフォーマンスなどで、思いのほか熱気(?)に包まれます。今年度から定員を小学生20人に限定しましたが、当日の欠席がいましたので最終的に18人となりましたが、保護者を含めると35人は超えていたと思います。人気の講座として定着しつつあります。実験内容はシャーベット、アイスクリーム作り、さらに、ドライアイス爆弾、ドライアイスロケットなどです。休憩なしの2時間半ほどの講座でしたが、参加者は最後の

ドライアイスロケットまで、飽きず(?)に楽しんでくれたようです。

函館市公民館で開催した『北海道における…』には84名の市民が参加してくれました。この講座では北海道開拓記念館の添田雄二学芸員が地層や史料を中心に「地層が語る過去2000年間の環境変動」と題して、鈴木琢也学芸員が考古学の見地から「古代北海道と本州の交流をさぐる」と題して、「2000年間に自然が人の生活にどのように影響を与えたか」といったテーマで講演をしました。当館からは、保科学芸員が林業経営から見た蝦夷地の森林の状態について「史料からみた蝦夷地の樹木と林業」と題し、私こと佐藤が函館山の自然林がどのように再生してきたかについて「函館山の自然林の形成とその変遷」と題して、「200年間に人が自然に対しどのように影響を与えたか」といったテーマで講演しました。時間延長がありましたが、最後まで講演を聴いてくださり、感謝しております。

佐藤 理夫



ドライアイスロケットの打ち上げに驚嘆する様子



函館山の自然林の形成とその変遷

平成16年度博物館講座開催表

ワークショップ（通年講座）

No.	講座名	開催期間	参加者数
1	自然観察入門講座	16年4月4日(日)～ 17年3月6日(日)	36
2	古文書調査講座	16年4月11日(日)～ 17年3月27日(日)	11
3	四季の星空観望講座	16年5月28日(金)～ 17年1月21日(金)	20

単 講 座

No.	講座名	開催期間	参加者数
1	身近な自然を調べる 春の渡り鳥を観察しよう	5月1日(土)	11
2	身近な自然を調べる タンポポの分布を調べてみよう	5月15日(土)	2
3	天体観測シリーズ 春の星図鑑(共催)	5月28日(金)	15
4	身近な自然を調べる 砂浜の生き物を拾ってみよう	6月12日(土)	8
5	自由研究 自然何でも(?)鑑定会	6月12日(土)	0
6	道南とっておき博物館バスツアー	6月20日(日)	35
7	港まつりポスターを見よう	7月3日(土)	0
8	特別企画展解説セミナー 「ペリー参府150年」	7月4日(日)	15
9	天体観測シリーズ 七夕の星を見てみよう(共催)	7月9日(金)	22
10	身近な自然を調べる イワバネを観察してみよう	7月10日(土)	3
11	展示解説セミナー ウラジオストクと函館	7月10日(土)	17
12	自由研究 自然何でも(?)鑑定会	7月24日(土)	1
13	身近な自然を調べる 親子で行く今、太古の旅	7月25日(日)	19
14	夏休み自由研究 鉄道車両の仕組みと1日見学会	7月28日(水)	51

単 講 座

No.	講座名	開催期間	参加者数
15	親子でつくるペタペタアート	8月1日(日)	16
16	夏休み自由研究 五稜郭探検	8月5日(木)	8
17	特別企画展解説セミナー 「土道」(第1回)	8月6日(金)	6
18	夏休み自由研究 昔の道具を調べよう	8月6日(金)	5
19	夏休み自由研究 縄文土器の拓本づくりをしよう ～大趣の例は面白い～	8月7日(土)	25
20	夏休み自由研究 博物館資料に触れてみよう	8月11日(水)	23
21	科学おもしろ講座 ドライアイスで遊ぼう	8月12日(木)	18
22	自由研究 自然何でも(?)鑑定会	8月13日(金)	0
23	特別企画展解説セミナー 「土道」(第2回)	8月13日(金)	10
24	科学おもしろ講座 宇宙と人間	8月21日(土)・ 22日(日)	2
25	天体観測シリーズ 秋の星図鑑と中秋の名月観望会(共催)	9月10日(金)	12
26	クイズ!「岩船参三」	9月25日(土)	0
27	身近な自然を調べる 函館山に戻るカラスの様子を 観察してみよう	10月2日(土)	0
28	身近な自然を調べる 秋の渡り鳥を観察しよう	10月30日(土)	9
29	公開講座 北海道における過去2000年間の 環境変動と人とのかかわり(共催)	11月13日(土)	84
30	冬休み自由研究 さし絵に挑戦!(共催)	1月12日(水)	31
31	科学おもしろ講座 もしも原子がみえたなら	1月14日(金)・ 18日(火)	3
32	冬休み自由研究 音響機を鳴らしてみよう	1月15日(土)	3
33	押し葉作りと木の葉を拓く	2月19日(土)	5
34	函館大火を知らう	3月26日(土)	4

それは、2004年9月8日早朝であった。日本列島を揺るがし続けながら時速80kmで日本海を北上した台風18号は道南に接近後、急に減速し、温存していたのか、その勢力を一気に拡大、本道全体に牙をむいた。

函館の最大瞬間風速は午前8時前に41.5m、50年前の洞爺丸台風の記録を塗り替え、凄まじいつめ跡を。

函館公園は倒木公園に、木々の緑は塩害で枯葉と化した。園内の博物館は…？本館は3階窓が枠ごと破壊、屋根トタンは捲れ、旧1号館は瓦が吹き飛び大穴が、看板・フェンスは倒木に押し潰され重傷、痛々しい姿、全治未定と診断。停電、電話不通の追い打ち、復旧見込み立たず。折しも博物館実習の総仕上げのとき、新収蔵資料展開催危うし。更に、当日は国指定重要文化財志海苔古銭と甕の修理搬出日。交通マヒ、午前中断念、午後懐中電灯頼りに作業完了。丸2日後回復、実習生達も必死で追い上げ、開催準備完了。努力、そして知恵と工夫の経験。

倒木は、台風の貴重な証しとして博物館に展示された。

佐野 幸治



旧1号館に倒木！



公園周辺の電柱

台風18号 博物館を直撃！！

平成16年度美術常設展から

港まつりポスターと吉田初三郎

現在、市史編さん室、図書館、博物館とが協力し、図書館所蔵ポスターの整理を進めており、函館市HPから画像をご覧いただけます。お披露目第一弾となる今年は函館の夏の風物詩く港まつり>をテーマとし、6月29日から8月22日までペリー展と同じ期間開催しました。港まつりは函館大火の翌年、開港77年目にあたる昭和10年に始まります。第一回ポスターは東京に制作依頼され、函館の開港を全倍の用紙に金銀フルカラーで表現した力作です。昭和13年から祭りの自粛のためかポスターは見当たらず、戦後再開すると函館で制作され、用紙は薄く大きさも半分になります。昭和29年の北洋博覧会、昭和33年の函館開港百年と、函館が活気づくとポスターも迫力を増し、外国船が多かったモチーフは昭和30年代後半から1万人踊りがメインになるなど、ポスターから発注者の意図や時代背景など多くの情報を読みとれました。

また、昭和11年の港まつりポスターを手掛けた鳥瞰図絵師吉田初三郎にも注目し、函館市鳥瞰図原画もあわせて展示しました。細かな描写に対する驚きと当時の街並みを見る懐かしさで観覧者に好評でした。



昔のポスターを見る大学生たち

岩 船 修 三

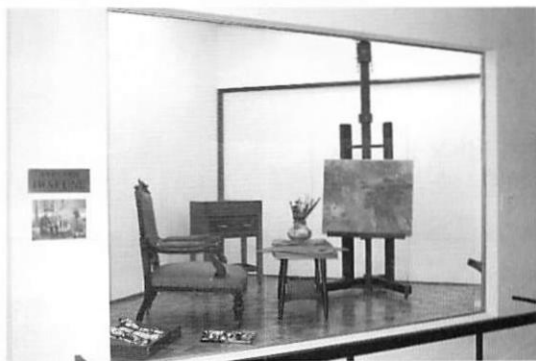
秋冬の常設展では、昨年度寄贈された函館を代表する画家・岩船修三の作品を紹介しました。

岩船修三は明治41年に、函館有数の豪商岩船呉服店三代目峰次郎の三男として生まれました。大正12年に函館商業学校に入り、油彩画を描き始め、絵画部オーロラ画会での活動に加え、赤光社展に出品したり、個展も開催しています。卒業後は上京し、川端画学校で学び、その仲間と麓堂社を結成し、共同のアトリエで制作に励みます。帝展や春陽会などにも出品しました。

昭和11年からフランスに渡り、各地をスケッチし、ピカソやマチス、在仏日本人美術家との交流からさまざまな影響を受け、昭和14年に帰国します。

戦後は函館に戻り、赤光社の再建に努め、全道展、光風会展を中心に活動し、公民館でも幅広い年齢層に長く絵画指導しました。昭和40年代からアイヌ・ユーカラを主題に幻想的な作品を数多く描き、絵本も出版しています。平成元年に80歳で死去するまで制作活動を続けました。今回の画学校のデッサン、日々の生活や子供の成長を描いた画日記やアルバムなどの遺品は初めて見る方が多いようでした。

霜村 紀子



制作道具でアトリエの雰囲気を再現

2004年 函館公園の出来事

山田 民夫



解体される店舗

函館公園内の住人となり、春・夏・秋・冬の一年の月日を結構忙しく過ごしてきたが、市民参加により明治12年(1879)に完成した公園は、現在、整備工事により風景が変わってきている。

左の写真は、「浅田松翁之碑」(明治30年4月建立)の所にあった「空き店舗」が昨年11月中旬に解体されている時のものである。

平成3年(1991)7月に刊行された幻洋社の「月刊はこだて」2号は、「特集再見・函館公園」であったが、函館公園雑学スクラップの中で、「大正初期に公園の休憩所を「菊水」と「札幌ビール」に許可する…」とある。

函館公園の花見時期に営業を続け、歳月を経るなかで事業主も変わってきた。「昭和29年(1954)の北洋博覧会の前年に「清寿司函館公園支店」となり、平成3～4年頃まで営業をしていた(清寿司関係者談)」とのことである。

「松翁碑」は、函館の飲食業の盛衰をも静かに見守ってきたのかな。

平成16年度新収蔵資料紹介

ここに掲載している新収蔵資料は、平成16年4月1日から平成17年1月31日までに受け入れたものです。

○寄贈資料

- ・ 一般用米穀類購入通帳 他 6件 20点
[函館市・坂本 拓 氏寄贈]
- ・ 尼港事件関係書類 4件 4点
[釧路市・足立 一男氏寄贈]
- ・ 第1回全国花火コンクール大会プログラム 1件 1点
[函館市・三瀬 哲秀氏寄贈]
- ・ 天地創造の神 他 岩船修三作品 6件 9点
[札幌市・牧田憲太郎氏寄贈]
- ・ 開道五十年記念北海道 他 2件 2点
[小平市・天野久二子氏寄贈]
- ・ 夷蝦地縮輿図 他 4件 4点
[函館市・小森 潔 氏寄贈]
- ・ 写真 1件 1点
[函館市・川又 哲 氏寄贈]
- ・ オウサマペンギン 他 3件 4点
[函館市・鷹股 正三氏寄贈]



オウサマペンギン
とヒゲペンギン

博物館機構・職員構成

■市立函館博物館(本館)

〒040-0044 函館市青柳町17-1

Tel.0138-23-5480 Fax.0138-23-0831

<http://www.museum.hakodate.hokkaido.jp>

hakohaku@museum.hakodate.hokkaido.jp

館長 佐野 幸治

管理係長 山田 民夫

熊谷 紘司

市村 栄子

佐藤 恒一

学芸係長 中村 公宣(考古・民族)

学芸員 佐藤 理夫(自然)

学芸員 保科 智治(歴史・民俗)

学芸員 霜村 紀子(美術)

山本 泰子

◇函館の歴史や自然、生活道具、函館周辺の考古資料、美術資料を展示

■市立函館博物館五稜郭分館

〒040-0001 函館市五稜郭町44-2

Tel.0138-51-2548 Fax.0138-51-2146

分館長 村岡 興志夫

紺谷 克孝

白幡 隆

学芸員 佐藤 智雄(歴史・民俗)

◇五稜郭、箱館戦争関係の問合せは分館まで

■郷土資料館(旧金森洋物店)

〒040-0053 函館市末広町19-15

Tel&Fax.0138-23-3095

◇金森洋物店、明治・大正期の生活道具を展示
詳しい資料の問合せは本館まで

ー誌名SARANIP(サラニップ)についてー
アイヌ語：シナの樹皮で編んだ袋。
博物館情報や研究成果などをSARANIPに
入れておき、その蓄積が今後重要な資料となっ
ていくようにと命名したものです。



SARANIPーサラニップーNo.44 2005.3.31発行

編集・発行 市立函館博物館

〒040-0044

函館市青柳町17-1(函館公園内)

Tel.0138-23-5480 Fax.0138-23-0831